学会大賞

日本ロシア文学会大賞（2019 年度）受賞記念講演

テクストを読む楽しみ
――『過ぎし年月の物語』と私――

佐　藤　昭　裕

0. はじめに

岡本崇男先生，ご懇切な紹介をどうも有り難うございました。

この度は，日本ロシア文学会大賞という特別な賞をいただくことになり，感謝の気持ちとともに身の引き締まる思いでおります。貴重な時間を割いて審査に当たってくださった選考委員の先生方には，心よりお礼申し上げます。

今日はどんな話をしようか迷いました。私は物事を抽象化して考えるのが苦手です。言葉にして話すのはさらに苦手です。それで具体的にすぎるかもしれませんが，自分でもできる話，年代記の話をそのままさせていただこうと思います。年をとって舌が回らなくなりました。お聞き苦しいところはお許しください。

私が大学に入ったのは 50 年前のことです。第 2 外国語を選ばなければなりませんでした。それで大した考えもなくロシア語に決めました。強いて言えば，ちょっと変わった言語，でも変わり過ぎない言語を選んだ，ということになるでしょうか。ちなみに私の最初のロシア語の先生は，いまでこそ友達同士のような付き合いをしていますが，木村崇さんです。私は 1969 年京都大学の文学部に入

学しました。ちゃんと語学の登録もしました。しかしその年は，東からめぐってきた 1 年遅れの学園紛争のせいで，いつまでたっても授業が始まりません。それで夏休みに東京の実家に帰り，日ソ学院というところに行ってみました。代々木時代の日ソ学院です。そこでロシア語を教えていたのが，ルムンバから帰ったばかりの木村さんでした。後に再会し，お互い驚きました。

3 年生になって学部に上がるとき，もう少しロシア語を続けたいと思いました。そこで，当時の京都大学では唯一それが可能な場所であった，言語学専攻に進みました。そして大学院の博士課程のとき，とにかく外国に行ってみたいというのが一番の理由だったと思いますが，ポーランド政府の奨学金をいただき，3 年間ワルシャワ大学に留学しました。

その後，しばらくは現代語の文法論を目指していました。しかしなかなか目標が定まりません。帰国してすぐの頃は，ポーランド語の運用能力もそれなりにあり，言語的直感も働きました。しかしあっという間に運用能力が衰え，直感も働かなくなってきました。そんな中で，興味の対象が文献言語，中世の言葉に移ってきました。90 年代の終わり頃，40 歳になるかならないかの頃です。

中世の文献を読むということについては，これはもう全く「日本古代ロシア研究会」のおかげです。古代ロシア研究会は関西の研究者を中心に 1962 年に発足したロシアの年代記を読む会です。今も続いています。1980―90 年代のリーダーは山口巖先生でした。この会で，月に 1 度集まって，古ロシア語を読む訓練を受けました。

古いテクストを読んでいると心が落ち着きます。言葉に直接手で触れているような気持ちになります。一つの文の意味が分かると嬉しくなります。たとえ数行分であっても，前後の意味がつながり，その文脈で言わんとしていることが分かったときの喜び，達成感はさらに大きくなります。

そしてもう一つ刺激となったのが，この頃テクスト言語学（Text linguistics）あるいは談話文法（Discourse grammar）という方法を知ったことです。ホッパーという人の論文[1]を読んだのがきっかけでした。

伝統的な文法は文を分析の単位とします。それに対し，テクスト言語学は，より大きなテクストとか談話という単位を対象とします。文脈のなかでの文法形式

の働きをさぐるのです。この講演と関連する範囲で，その考えの幾つかをまとめてみました。

第 1 に，言語のテクストは意味的に一貫し，かつ文法面において「結束的」cohesive な —— つまり，前後のつながりのよい —— 構造をもっていなければならない，という考えです。ハリデイとハサン[2] は結束性を作りだす仕組みとして「指示」reference,「代用」substitution,「省略」ellipsis,「接続」conjunction,「語彙的結束性」lexical cohesion の 5 つをあげています。

第 2 はテクストのタイプという考えです。ヴァインリヒ[3] によれば，言語のテクストは大きく「語り」Erzählung（英 narrative）と「説明」Besprechung（英 descriptive）に分けられます。内容はこの名称からもある程度想像がつきますが，ここで重要なのは動詞の時制形式との関係です。すなわち「語り」ではもっぱら過去形を中心とした時制形式が使用され，「説明」では現在形を中心とした時制形式が使用されるのです。

第 3 は「語り」のテクストに関することです。ヴァインリヒやホッパーの考えによれば，語りのテクストは，物語の主要な筋を示し，継起的に起きた出来事を指す「前景」Vordergrund, foreground の部分と，前景の出来事と同時に起こり，補助的な情報を示す「背景」Hintergrund, background の部分からできているというのです。この二つが対立し「浮き彫り効果」が生じるのです。前景と背景は言語ごとに固有の手段と結びついています。マースロフによれば「物語は aorist で進み，imperfect で留まる」[4] ということになります。現代ロシア語で言えば「物

---

[1] Hopper, J. H. “Aspect and foregrounding in discourse.” *Syntax and Semantics, vol.12. Discourse and Syntax*. New York, San Francisco, London: Academic Press. 1979. 213-241.

[2] Halliday, M. A. K. and R. Hasan. *Cohesion in English*. London, New York: Longman. 1976.

[3] Weinrich, H. *Tempus: Besprochene und erzählte Welt*. 3.Auflage. Stuttgart: Verlag W. Kohlhammer. 1977.（日本語訳：脇坂豊，大瀧敏夫，竹島俊之，原野昇共訳.『時制論 —— 文学テクストの分析 ——』紀伊國屋書店．1982.）

[4] *Маслов, Ю. С.* Типология славянских видо-временных систем и функционирование форм претерита в «эпическом» повествовании // *Бондарко, А. В. (ред.)* Теория грамматического значения и аспектологические исследования. Л.: «Наука». 1984. 28.

語は完了体過去で進み，不完了体過去で留まる」のです。

対象を中世の言葉，文献言語とし，テクスト言語学という方法に触れたとき，新しい道が開けました。初めて書いたのが，古教会スラブ語の完了体動詞の現在形について考えた 1989 年と 1990 年の論文です[5]。後者は言語学科の恩師西田龍雄先生の還暦記念論文集に書いたものです。

1.『過ぎし年月の物語』における語順とテクストのタイプ[6]

このあと年代記の研究 —— 勉強に進みました。対象は 12 世紀初めに成立した『過ぎし年月の物語』と呼ばれる，ルーシで作られた最初の年代記，編年体の歴史記録です。ルーシというのは，当時のキーエフを中心とした古代ロシア国家です。1987 年に古代ロシア研究会による邦訳[7]が出ています。先輩たちの長年にわたる共同研究の成果です。私もその最後の段階で，ほんの少しですが，参加させ

---

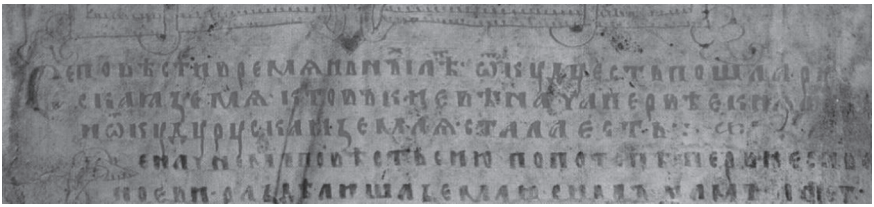
[5] Sato, Akihiro. “Praesens dokonany w języku staro-cerkiewno-słowiańskim”. *Japanese Slavic and East European Studies* 10. 1989. 73-93.; 佐藤昭裕「古代教会スラブ語のテンス・アスペクト体系と完了体現在について」崎山理，佐藤昭裕他編『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂．1990. 898-913.

[6] 1 節，2 節の議論は佐藤昭裕「古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』研究 —— その言語とテクストの構造 —— 」『京都大学文学部研究紀要』31. 1992. 231-312.; *Сато, Акихиро.* Структура повествования и текстообразующие средства в «Повести временных лет» и «Новгородской первой летописи» // Comparative Studies in Slavic Languages and Literatures: Japanese Contributions to the 11th International Congress of Slavists. Tokyo: Japanese Association of Slavists. 1993. 13-39.; Sato, Akihiro. “Struktura tekstu kroniki staroruskiej *Powieść minionych lat* i geneza staroruskiego języka literackiego: Uwagi z punktu widzenia gramatyki tekstu.” *Linguam amicabilem facere: Ludovico Zabrocki in memoriam*. Poznań. Wydawnictwo Naukowe UAM. 1999. 235-248.; 佐藤昭裕『中世スラブ語研究 —— 『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語 ——（ユーラシア古語文献研究叢書 3）』京都大学大学院文学研究科．2005. vi + 411.（序章，第 1 章，第 2 章）の議論による。

[7] 國本哲男，山口巌，中条直樹他訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会．1987.

て貰うことができました。

1）　ラヴレンチー写本（1377 年）第 1 葉裏

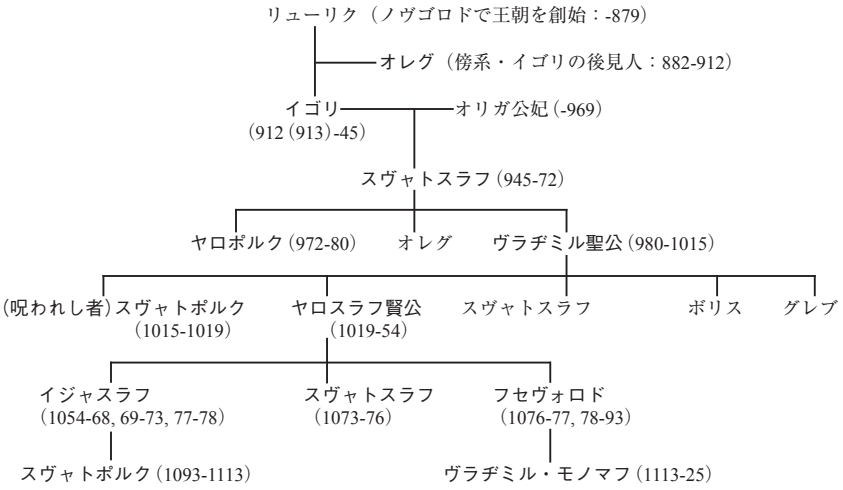


写真はその写本の一つ，ラヴレンチー写本の冒頭の部分です。初めの 3 行に，朱を使って Се повѣсти времяньных лѣт. откуду есть пошла руская земя. кто въ киевѣ нача первѣе княжит и откуду руская земля стала есть.[8]「見よ，過ぎし年月の物語，（これは）どこからルシの国が起こったか，誰がキエフで初めに公として治め始めたか，そしてどこからルシの国が始まったか（の物語である）」とあります。これが『過ぎし年月の物語』というタイトルの由来です。

主な登場人物を系図にしてみました。ノヴゴロドに発したリューリクの子孫たちがキエフに拠って王朝を発展させ，ルーシを統一していく過程が描かれます。

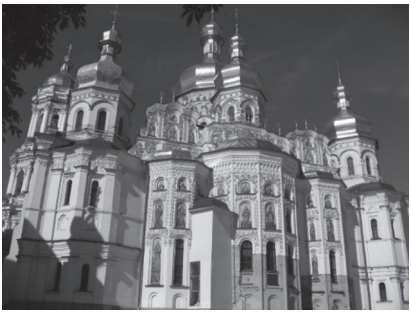
2）　リューリク王朝＝キエフ公（太字）を中心とした一族の系譜。（　）内は在位

[8] 以下で引用する『過ぎし年月の物語』テクストは Полное собрание русских летописей, Т.1. Лаврентьевская летопись, вып.1. Повесть временных лет. Изд. 2. 1926（『ロシア年代記全集第 1 巻第 1 部　第 2 版』）による。その際 ТОДРЛ で示されている方法に準じて簡略表記をした。但しѣの使用は残した。



ペチェルスキー修道院の写真も見てみましょう。この年代記はこの修道院で書き継がれました。写真は修道院の主たる教会である「生神女就寝大聖堂」Успенский собор です。

3） ペチェルスキー修道院　生神女就寝大聖堂（ただし現在の建物は第 2 次大戦後の再建）



修道院はドニエプル河岸の丘の上にあります。その地形を利用して洞窟が掘られています。ペチェルスキー печерьскыи は古ロシア語の печера，現代語では пещера の形容詞形です。創設者のアントニーがこの丘に洞窟を掘って庵室とし，修行に励んだことが起源とされるからです。洞窟はその後も掘り進められました。今は近い洞窟と遠い洞窟の二つがあります。ロシアの教会で使う黄色い蝋燭を持って地下に降り，小礼拝堂や墓所をめぐって歩くことができます。

私がこの年代記の言語を勉強し始めたのは 90 年代の初め頃でした。最初は特に具体的目標もありませんでした。その本文を読み返すことから始めました。名詞と動詞，どちらを面白いと思うか，人によって興味の分かれるところと思うのですが，私は動詞にひかれます。動詞に注意してテクストを読んでいくうちに，語順が現代語と違うことに気づきました。

まず主語が省略されるケース，動詞 V だけの文が現代語に比べ，圧倒的に多いことに気づきます。文脈から特定できる限り，主語は省略します。書かずに済ませるのです。これが大前提となります。

その上で明示的主語が現れ，主語の位置が問題となる場合を見ます。するとVS 語順の文，つまり動詞 V が先に立ち主語 S が続く文が，これも現代語と比べ，遙かに多いことに気づきます。

次の例 4）は『過ぎし年月の物語』945 年の記事の一部です。2）の系図にも出てくるオリガ公妃が登場します。リューリク王朝の支配を確立し，ルーシに正教を導入したヴラジーミル聖公の祖母です。彼女は近隣のドレヴリャネ族に夫イゴリを殺されます。その「第 1 の復讐」の物語です。

4） 945 年の記事より「オリガの第 1 の復讐」の物語 [9, 10]

a. рѣша[V1](aor.3pl) же Деревляне[S1]. «се князя убихомъ Рускаго. поимемъ жену его Вольгу за князь свои Малъ и С(вя)тослава. и створимъ ему якоже хощемъ». и послаша[V2](aor.3pl.) Деревляне[S2] лучьшие мужи числомъ .к. въ лодьи к Ользѣ. и присташа[V3](aor.3pl.) подъ Боричевымъ в лодьи. бѣ[V4](impf.3sg.) бо тогда вода[S4] текущи[V4′](PrPrtA.). въздолѣ горы Киевьския. и на подольи не сѣдяху[V5](impf.3pl.) людье[S5]. но на горѣ градъ[S6] же бѣ[V6] (impf.3sg.) Киевъ. идеже есть[V7](pres.3sg.)

нынѣ дворъ[S7] Гордятинъ. и Ни[ки]фо[ро]въ. а дворъ[S8] княжь бяше[V8](impf.3sg.) в городѣ. идеже есть[V9](pres.3sg.) [н(ы)нѣ дворъ[S9] Воротиславль. и Чюдин(ъ). а перевѣсище[S10] бѣ[V10](impf.3sg.) внѣ град(а). и бѣ[V11](impf.3sg.) внѣ град(а) дворъ[S11] другыи. идѣже ес(ть)[V12](pres.3sg.)] дворъ[S12] Деместиковъ. за с(вя)тою Б(огороди)цею надъ горою дворъ теремныи бѣ[V13](impf.3sg.) бо ту теремъ[S13] каменъ. и повѣдаша[V14](aor.3pl.) Ользѣ яко Деревляне[S15] придоша[V15](aor.3pl.). и возва[V16](aor.3sg.) е Ольга[S16] к собѣ. [и реч(е)[V17](aor.3sg.) имъ] «добри гостье придоша». и рѣша[V18](aor.3pl.) Деревляне[S18] «придохомъ княгине». и реч(е)[V19](aor.3sg.) имъ Ольга[S19] «да гл(аголи)те что ради придосте сѣмо». рѣша[V20](aor.3pl.) же Древляне[S20]. «посла ны Дерьвьска земля. рькуще сице «мужа твоего убихомъ. бяше бо мужь твои аки волкъ. восхищая и грабя. а наши князи добри суть. иже распасли суть Деревьску землю. да поиди за князь

---

[9] 引用に当たり丸括弧を用いて титло を開いた。動詞 V と主語 S には通し番号をふった。動詞の複合形式については，たとえば上の V4, V4′ のように，それぞれの要素に同一の番号をふるとともにプライム記号「′ 」を使って区別した。語順を決めるに当たっては線状構造の前方の要素（この例では V4）の位置によった。演者は古ロシア語では現代語と異なり，分詞も明示的な主語を取り得ると考える。但し実際に特定の名詞句を分詞の主語として分析するのは，統語的に他の選択肢がない場合に限る。例えば上の例中で Волга(S25) сѣдящи (V26) в теремѣ. посла(V25) по гости の文脈では Волга(S25) は定動詞 посла(V25) の主語であると理解した。詳細は前掲佐藤『中世スラブ語研究』第 1 章，注 22 を参照。引用符 « » で囲んだ部分は直接話法で引用された登場人物の言葉を示す。これについては独立したテクスト部分をなすと考え，後ほど言及することにする。引用部の最後に示した数字 [55-13] は引用部が『ロシア年代記全集　第 1 巻第 1 部　第 2 版』のコラム 55, 13 行目で始まることを示す。難読箇所については *Лихачев, Д. С.* Повесть временных лет. (подготовка текста, перевод, статьи и комментарии Д. С. Лихачева, под редакцией В. П. Адриановой-Перетц.) Изд. 2-е исправленное и дополненное. СПб.: «Наука». 1996. および *Шахматов, А. А.* Повесть временных лет. том 1: Вводная часть, Текст, Примечания. Петроград.: «Императорская Археографическая Комиссии». 1916. に掲載されたテクストを参考にした。

[10] 動詞の形式については次のような略号を用いる。aor.=aorist, impf.=imperfect, Impr.=imperative, l-Prt.=l-participle, pres.=present, PrPrtA.=present participle active, PtPrtA.=past participle active, PtPrtP.=past particile passive.

нашь за Малъ»». бѣ[V21](impf.3sg.) бо имя[S21] ему Малъ. князю Дерьвьску. реч(е)[V22](aor.3sg.) же имъ Ольга[S22] «люба ми есть рѣчь ваша. уже мнѣ мужа своего не крѣсити. но хочю вы почтити наутрия предъ людьми своими. а нынѣ идѣте в лодью свою. и лязите въ лодьи величающеся. [и] азъ утро послю по вы. вы же рьцѣте «не едемъ на конѣх(ъ). ни пѣши идемъ. но понесѣте ны в лодьѣ». и възнесуть вы в лодьи». и отпусти[V23](aor.3sg.) я в лодью. Ольга[S24] же повелѣ[V24](aor.3sg.) ископати яму. велику и глубоку. на дворѣ теремьстѣмь. внѣ града. и заутра Волга[S25] сѣдящи[V26](PrPrt.) в теремѣ. посла[V25](aor.3sg.) по гости. и придоша[V27](aor.3pl.) к нимъ. гл(аголю)ще[V28](PrPrtA.). «зоветь вы Ольга на честь велику». они[S29] же рѣша[V29](aor.3pl.) «не едемъ на конихъ ни на возѣхъ. [ни пѣши идемъ] понесѣте ны в лодьи». рѣша[V30](aor.3pl.) же Кияне[S30] «намъ неволя князь нашь убьенъ. а княгини наша хоче за вашь князь» и понесоша[V31](aor.3pl.) я в лодьи. они[S32] же сѣдяху[V32](impf.3pl.) в перегъбѣх. въ великихъ сустугахъ гордящеся[V33](PrPrtA.). и принесоша[V34](aor.3pl.) я на дворъ к Ользѣ. [и] несъше[V35](PtPrtA.) вринуша[V36](aor.3pl.) е въ яму и с лодьею. приникъши[V37](PtPrtA.) Ольга[S37] и реч(е)[V38](aor.3sg.) имъ «добра ли вы честь». они[S39] же рѣша[V39](aor.3pl.) «пущи ны Игоревы см(е)рти». и повелѣ[V40](aor.3sg.) засыпати я живы. и посыпаша[V41](aor.3pl.) я. [55-13]

b. ドレヴレャネは[S1] 言った[V1]「さあ，我々はルーシの公を殺した。彼の妻オリガを自分たちの公マルのために捕えよう。スヴャトスラフも（捕え），これを思うままにしよう。」そしてドレヴリャネは[S2] その数 20 人の身分の高い家臣を船でオリガのもとへ送り[V2]，（彼らは）ボリチェフ（の坂）の下に船をとめた[V3]。その頃水は[S4] キエフの丘のそばを流れていて[V4]，ポドリエには人々は[S5] 住んでおらず[V5]，丘の上に（いた）からである。キーエフの町は[S6]，いまゴルヂャタとニキフォルの邸が[S7] ある[V7] ところにあり[V6]，一方公の邸は[S8]（その）町の中にあり[V8]，いまそこには［ヴォロチスラフとチュヂンの邸が[S9]］ある[V9]。［また鳥網場は[S10] 町の外にあり[V10]，町の外には他の邸も[S11] ある[V11]。そこには（いま）］デメスチクの邸が[S12]［あって[V12]］，丘の上の聖生神女教会のうしろに塔邸が（ある。そう呼ばれるのは）そこに

石造の塔が[S13]あった[V13]からである。（人々は）オリガにドレヴリャネが[S15]来た[V15]ことを告げた[V14]。そこでオリガは[S16]彼らを自分のもとに呼び入れて[V16]［彼らに言った[V17]］「良い客人たちが来た。」そこでドレヴリャネは[S18]言った[V18]「私たちは来ました，公妃よ。」そこでオリガは[S19]彼らに言った[V19]「何のためにお前たちはここへ来たのか言いなさい。」ドレヴリャネは[S20]言った[V20]「ドレヴリャネの国が，こう言って，私たちを使者として遣わしたのです。『私たちはあなたの夫を殺しました。あなたの夫が狼のように盗みや掠奪を行っていたからです。でも私たちの公たちは善良で，ドレヴリャネの国をよく治めてきました。私たちの公マルに嫁いで下さい。』」彼，ドレヴリャネの公の名は[S21]マルだった[V21]のである。オリガは[S22]彼らに言った[V22]「私にはお前たちの言葉が気に入りました。もう私には自分の夫を生き返らせることはできません。だから私は明朝自分の家臣の前でお前たちに敬意を表したいと思います。いまは自分たちの船に戻り，威張って船に入りなさい。私は（明）朝お前たちを迎えに使者を送りましょう。お前たちは『我々は馬でも行かぬ。徒歩でも行かぬ。我々を船に乗せたまま運べ』と言いなさい。そうすれば彼らはお前たちを船に乗せたまま運ぶでしょう。」そして彼らを船に帰らせた[V23]。それからオリガは[S24]町の外の塔邸に大きくて深い穴を掘るように命じた[V24]。翌朝オリガは[S25]塔に座り[V26]，客人を迎えにやった[V25]。（オリガの使者たちは）彼らのところにやって来て[V27]，言った[V28]「オリガが大きな栄誉（を与える）ためにあなた方を呼んでいます。」彼らは[S29]言った[V29]「我々は馬でも車でも行かぬ。［徒歩でも行かぬ。］我々を船に乗せたまま運べ。」キーエフの人々は[S30]言った[V30]「仕方がありません。私たちの公は殺され，また私たちの公妃はあなた方の公に嫁ごうと望んでいます。」そして，彼らを船に乗せたまま運んだ[V31]。彼らは[S32]手を腰にあて，胸に大きな飾留金をつけ，大威張りで[V33]座っていた[V32]。（人々は）彼らを（塔）邸にいるオリガのところに運んで来て[V34]，そのまま[V35]船もろとも彼らを穴の中に投げ込んだ[V36]。オリガは[S37]身を屈め[V37]，（穴の中の）彼らに言った[V38]「お前たちにはこの栄誉が気に入ったか。」彼らは[S39]言った[V39]「これはイゴリの死に方よりももっと酷い。」（オリガは）

彼らを生きたまま埋めることを命じ[V40]，（人々は）彼らを埋めた[V41]。

c. V1S1—V2S2—V3—V4S4—V5S5—S6V6—V7S7—S8V8—V9S9—S10V10—V11S11— V12S12—V13S13—V14—S15V15—V16S16—V17—V18S18—V19S19—V20S20— V21S21—V22S22—V23—S24V24— S25[V26]V25—V27—V28—S29V29—V30S30—V31—S32V32—V33—V34—V35—V36—V37S37—V38—S39V39—V40—V41

○ 合計 VS：SV ＝ 17：9，VS タイプの文が優勢

冒頭部分をちょっと読んでみます。рѣша[V1] же Деревляне[S1] からはじまって «се князя убихомъ … » のところは台詞なので別扱いにし，послаша[V2] Деревляне[S2], не сѣдяху[V5] людье[S5] と，途中で SV 語順も現れるものの，VS 語順の文が続きます。全体を模式化して VS 語順の文と SV 語順の文だけを残すと，4c）のようになり，VS 対 SV ＝ 17 対 9 で VS が優勢になります。

これを見ても何も感じないかもしれません。しかし同じ内容の現代語と比べてみると違いがはっきりします。例の 5）は同じ事件をソロヴィヨフが初めから現代のロシア語で —— と言っても，ソロヴィヨフは 19 世紀の歴史家ですが —— 語ったものです。リハチョーフ等の現代語訳よりも，少なくとも語順に関しては，自然な文章になっています。同じように模式化してみると 5b）のようになります。違いは一目瞭然です。SV 語順が圧倒的に優勢です。主語を省略した文も殆どありません[11]。

5） ソロヴィヨフによる同内容の文章[12]。

a. Убив Игоря, древляне[S1] стали[V1] думать: «Вот мы убили русского князя, возьмем

[11] V と S の通し番号は，4a）の古ロシア語のテクストに対応する動詞あるいは名詞が現れる場合に限り，同じ番号をふった。

[12] *Соловьев, С. М.* История России с древнейших времен, Кн.1. (т. 1-2.) М.: «Изд. Социально-экономической литературы». 1959. 153-154.（原著は 1851 刊）

теперь жену его Ольгу за нашего князя Мала, а с сыном его, Святославом, сделаем, что хотим». Порешивши таким образом, древляне[S2] послали[V2] двадцать лучших мужей своих к Ольге в лодье. Узнав[V14], что пришли[V15] древляне[S15], Ольга[S16] позвала[V16] их к себе и спросила[V19], зачем они пришли? Послы[S20] отвечали[V20]: «Послала нас Древлянская земля сказать тебе: мужа твоего мы убили, потому что он грабил нас, как волк, а наши князья добры, распасли Древлянскую землю, чтобы тебе пойти замуж за нашего князя Мала?» Ольга[S22] сказала[V22] им на это: «Люба мне ваша речь; ведь, в самом деле, мне мужа своего не воскресить! Но мне хочется почтить вас завтра пред своими людьми; теперь вы ступайте назад в свою лодью и разлягтесь там с важностию; а как завтра утром я пришлю за вами, то вы скажете посланным: не едем на конях, нейдем пешком, а несите нас в лодье! Они вас и понесут». Когда древляне[S23] ушли[V23] назад в свою лодку, то Ольга[S24] велела[V24] на загородном теремном дворе выкопать большую, глубокую яму и на другое утро послала[V25] за гостями, велев сказать им: «Ольга зовет вас на великую честь». Древляне[S29] отвечали[V29]: «Не едем ни на конях, ни на возах и пешком нейдем, несите нас в лодье!». Киевляне[S30] сказали[V30] на это: «Мы люди невольные; князь наш убит, а княгиня наша хочет замуж за вашего князя», — и понесли[V31] их в лодье, а древляне[S32] сидя[V32] важничали[V33]. Когда принесли[V34] их на теремный двор, то бросили[V36] в яму как есть в лодье. Ольга[S37] нагнулась[V37] к ним и спросила[V38]: «Довольны ли вы честью?». Древляне[S39] отвечали[V39]: «Ох, хуже нам Игоревой смерти!». Княгиня[S40] велела[V40] засыпать их живых и засыпали[V41].

b. S1V1—S2V2—V14—V15S15—S16V16—V19—S20V20—S22V22—S23V23—S24V24—V25—S29V29—S30V30—V31—S32V32—V33—V34—V36—S37V37—V38—S39V39—S40V40—V41

このような現代語との語順の違いは，たまたまこの記事で見られるのではありません。4）のようにVS語順が優勢な文脈は『過ぎし年月の物語』の中で，ごく普通に見られます。その基調をなしていると言ってもよいでしょう。ところが

この年代記をさらに読み進めると，所々でこれとは逆に，現代語と同じ SV 語順の文が集中して現れる箇所があることに気づきます。例えば次の 6）がその例です。969 年の記事です。上の 4）に登場する公妃オリガの死を記した，そのすぐ後の記述です。

6） 969 年，公妃オリガの死の記事のあとで [13, 14]

a. си[S1] быс(ть)[V1](aor.3sg.) предътекущия кр(ес)тьяньстѣи земли. аки деньица предъ с(о)лнц(е)мь. и аки зоря предъ свѣтомъ. си[S2] бо сьяше[V2](impf.3sg.) аки луна в нощи. тако и си[S3] в невѣрныхъ ч(е)л(о)в(ѣ)ц(е)хъ свѣтящеся[V3](PrPrtA.). аки бисеръ в калѣ. кальни бо бѣша[V4](impf.3pl.) грѣх(омъ). не омовени[V5](PtPrtP.) кр(е)щ(е)н(ье)мь с(вя)т(ы)мь. си[S6] бо омыся[V6](aor.3sg.) купѣлью с(вя)тою. и совлечеся[V7] (aor.3sg.) грѣховною одежевъ. ветхаго ч(е)л(о)в(ѣ)ка Адама. и въ новыи Адамъ облечеся[V8] (aor.3sg.) еже[(S9=Rel.Pron.)] есть[V9](pres.3sg.) Х(ристо)съ. мы[S10] же рцѣмъ[V10](Impr.1pl.) к неи. «рад(у)ися Руское познанье. къ Б(ог)у начатокъ примиренью примиренью[A] быхомъ[B]». си[S11] первое вниде[V11](aor.3sg.) в ц(а)рство н(е)б(е)сное от Руси. сию бо хвалят(ь)[V12](pres.3pl.) Рустие с(ы)н(о)ве[S12]. аки началницю. ибо по см(е)рти моляше[V13] (impf.3sg.) Б(ог)а за Русь. пр(а)в(е)дн(ы)хъ бо д(у)ша[S14] не умирают[V14](pres.3pl.). якоже реч(е)[V15](aor.3sg.)

---

[13] 以下の文中，A. 二つ目の примиренью は削除し，また B. бысть，C. похваляему，D. сию，E. видяще，F. лежащю，G. защитилъ のように読む。

[14] 聖書本文からの引用は『』で囲んで示す。語順を含め，聖書テクストの忠実な訳である可能性を考え，ここでの年代記の言語そのものの分析からは外す。年代記中の聖書テクストの引用の問題については次を参照。*Сато Акихиро.* Цитаты из Библии в «Повести временных лет» // Comparative Studies in Slavic Languages and Literatures: Japanese Contributions to the 13th International Congress of Slavists. Tokyo.: Japanese Association of Slavists. 2003. 5-38.; 佐藤昭裕「古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』における聖書からの引用」『人文知の新たな総合に向けて　21 世紀 COE プログラム「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」第 2 回報告書 IV［文学篇 1 論文］』京都大学大学院文学研究科, 2004. 45-84.; 前掲佐藤『中世スラブ語研究』349ff.

Соломанъ[S15].『похвала[C]пр(а)в(е)дн(о)му възвеселятся людье.』б(е)с(ъ)см(е)ртье бо есть[V16] память[S16] его. яко от Б(ог)а познавается[V17] (pres.3sg.) и от ч(е)л(о)в(ѣ)къ. се[D] бо вси[S18] ч(е)л(о)в(ѣ)ци прославляють[V18](pres.3pl.) видяща[E, V19] (PrPrtA.) ляжащая[F] в тѣлѣ на многа лѣт(а). реч(е)[V20](aor.3sg.) бо пр(о)р(о)къ[S20]『прославляющая мя прославлю.』о сяковых(ъ) бо Д(а)в(ы)дъ[S21] гл(агола)ше[V21](impf.3sg.)『в памят(ь) [вечную]. пр(а)в(е)дн(и)къ будеть. от слуха зла не убоится. готово с(е)р(д)це его уповати [на] Г(о)с(под)а. утвердися с(е)р(д)це его и не подвижется.』Соломанъ[S22] бо реч(е)[V22](aor.3sg.)『пр(а)в(е)дн(и)ци въ вѣки жиуть и от Г(оспод)а мьзда имь есть. и строенье от Вышняго. сего рад(и) приимуть ц(а)рствие красотѣ. и вѣнець добротѣ от руки Г(о)с(под)ня. яко десницею покрыеть я. и мышцею защитить я.』защитить[G, V23](l-Prt.) бо есть[V23'](pres.3sg.) сию бл(а)ж(е)ну Вольгу. от противника и супостата дьявола. [68-7]

b. この女（オリガ）は S[1]，日の出前の明星のように，また夜明け前の空焼けのように，このキリスト教の国にとっての先駆者であった[V1]。この女は[S2]夜の闇のなかの月のように輝いていた[V2]。そのようにこの女は[S3]，神を信じない人々の中にあって，泥の中の真珠のように光を放っていた[V3]。（人々は）罪に汚れていて[V4]，聖なる洗礼によって清められていなかった[V5]。この女は[S6]聖なる洗礼盤によって清められ[V6]，古き人アダムの罪深い衣を脱ぎ[V7]，キリストである[V9]新しきアダムを身にまとった[V8]のである。我々は[S10]彼女に向かって言おう[V10]，「喜びなさい，ルシが神を知ったことを。（これが私たちと神との）和解の始まりでした。」この女は[S11]初めてルシから天の王国に入った[V11]。この女をルシの子たちは[S12]先達として讃えている[V12]。死後も彼女がルシのために神に祈っている[V13]からである。正しい者の魂は[S14]死なない[V14]。ソロモンが[S15]言っている[V15]ように，『讃えられる正しい者を人々は喜ぶ【箴言 29.2】。』神と人々によって認められる[V17]のであるから，正しい者の思い出は[S16]不死である[V16]。この者をすべての人は[S18]讃えている[V18]。永年にわたり肉体の中で（朽ちずに）保たれているのを見た[V19]からである。預言者は[S20]言った[20]，『私を尊ぶ者たちを私は尊ぶ【サムエル記上 2.30】。』

このような者たちについてダビデは[S21]言った[V21]，『正しい者は［永遠に］記憶されるであろう。彼は悪いおとずれを恐れず，その心は主に信頼してゆるがない。その心は落ちついて恐れることがない【詩篇 112.6-8】。』ソロモンは[S22]言った[V22]，『正しい者は永遠に生き，彼らには主の報いといと高きものの助けがある。この故に（正しい者は）美しい天国と善の冠を主の手より受ける。（主は）右手で彼らを覆い，腕で彼らを守られる【外典ソロモンの知恵 5.15-16】。』（主は）この至福なオリガを，敵であり，対抗者である悪魔から守られた[V23]のである。

c. S1V1—S2V2—S3V3—V4—V5—S6V6—V7—V8—V9—S10V10—S11V11—V12S12—V13—S14V14—V15S15—V16S16—V17—S18V18—V19—V20S20—S21V21—S22V22—V23

○ 合計 VS：SV ＝ 4：10，SV タイプの文が優勢

冒 頭の部分を少し読んでみます。си[S1] быс(ть)[V1] предътекущия「この女（オリガ）は先駆者であった」，си[S2] бо сьяше[V2]「この女（オリガ）は輝いていた」，тако и си[S3] в невѣрныхъ ч(е)л(о)в(ѣ)ц(е)хъ свѣтящеся[V3](PrPrtA.)「そのようにこの女（オリガ）は神を信じない人々の中にあって光りを放っていた」というように，SV 語順の文が続きます。この文脈でも上の 4) と同じように登場人物の台詞，V だけの文，そして新たに加わった聖書からの引用部分を外して模式化します。すると 6c) のようになります。VS：SV ＝ 4：10 で明らかに SV タイプの文が優勢になるのです。

4）と 6）ではどこが違うのでしょう。まず内容が違います。4）では具体的事実，すなわち歴史的出来事，事件がそのまま語られています。一方 6）では，その事件の主要な登場人物について，ここではオリガ公妃について，その人柄，信仰，功績が評価され，コメントされるのです。

形式も違います。4）ではもっぱら動詞の過去形が使われています。さらに aorist と imperfect が交替して現れ，前景と背景の出来事が区別されます。

内容的に一貫し，動詞の過去形が使われる文脈，aorist と imerfect の交替が物語に「浮き彫り効果」を与える文脈，これはヴァインリヒの言う「語り」のテク

ストそのものです。もう一つ特徴があります。登場人物の言葉，台詞が直接話法で引用されているのです。これにより事件はいっそう鮮烈に，臨場感をもって語られます。

6）の文脈はどうでしょう。こちらは 4）と対立しているからと言って，単純に「説明」のテクストとみなすことはできません。説明のテクストではもっぱら動詞の現在形が使われます。しかし，ここでは過去と現在の両方が現れています。しかしこれこそが，このテクストの特徴と考えられます。過去形を使ってその人物の業績を再確認します。そして現在形を使って現在の世界と結びつけ，その人柄を評価するのです。さらに聖書本文からの引用がその評価を裏付けます。この評価は，この年代記の記者であるペチェルスキー修道院の僧たちの立場から行われます。内容的に一貫し，形式的にも一定の特徴を持つこの文脈も，一つのテクストタイプと見ることができます。

『過ぎし年月の物語』に現れる 4）のタイプのテクストを「事実叙述」―― 若い頃はちゃんと発音できたのですが，この年になると舌を噛みそうです。もう少し発音しやすい名前をつけておけばよかったと思います ――，6）のタイプのテクストを「コメント」タイプのテクストと呼ぶことにします。それぞれの特徴は 7）のようにまとめることができます。

7）　二つのテクストタイプ：「事実叙述」と「コメント」

A.　「事実叙述」タイプ。例 4）
　内容：歴史的事実，事件について語る。
　形式：動詞の過去形（aorist, imperfect）を使用。
　その他：直接話法で引用された登場人物の言葉を含む。
　語順：VS 語順の文が優勢。

B.　「コメント」タイプ。例 6）
　内容：歴史的出来事の主要登場人物について年代記作者が評価する。
　形式：動詞の過去形を用いて事実を確認し，現在形を用いて評価する。
　その他：聖書本文を引用し評価の根拠とする。
　語順：SV 語順の文が優勢。

VS か SV かという語順の違いが，これだけのことと関係しているのです。図式的に言えば，この年代記全体のテクストは，この二つのタイプのテクスト部分が交互に現れることによって構成されます。

ここで厳密に考えると，「事実叙述」タイプのテクスト中に引用される登場人物の言葉，すなわち「台詞」の部分と，「コメント」タイプのテクスト中に現れる「聖書」本文も，独立したテクスト部分として扱うべきです。従って最終的には 4 つのタイプのテクストが区別されることになります。

8）『過ぎし年月の物語』を構成するテクストのタイプ。Ⓐ，Ⓑ，Ⓓは書き言葉，C は話し言葉。

Ⓐ　「事実叙述」タイプ：「コメント」タイプのテクストと交互に現れる。
Ⓑ　「コメント」タイプ：「事実叙述」タイプのテクストと交互に現れる。
C　「直接引用」タイプ：「事実叙述」タイプのテクスト中に現れる。
Ⓓ　「聖書引用」タイプ：「コメント」タイプのテクスト中に現れる。

「事実叙述」と「コメント」タイプは交互に現れます。そして「直接引用」は「事実叙述」の内部に，「聖書引用」は「コメント」タイプの内部に現れます。また「事実叙述」「コメント」「聖書引用」の 3 つは書き言葉です。「直接引用」は話し言葉のいわばサンプルとなります。

この 4 つのタイプのテクストを区別したうえで，あらためて語順の問題に帰ります。VS 語順，SV 語順のどちらが優勢かということは，テクストのタイプによる文体の違いから出ていると考えられます。その際，いずれか一方が普通の文体，日常的言語の文体であり，他方が特別な文体であると考えるのが自然です。どちらが日常の文体か，それを確かめるには話し言葉，「直接引用」タイプのテクストが手がかりになります。ここで，先ほど後回しにした，4）の「オリガの第 1 の復讐」の物語中に現れる登場人物の「台詞」を抜き出してみます。次のようになります。

9） 4）の「オリガの第 1 の復讐」の物語中に現れる登場人物の言葉

i ドレヴリャネの言葉：«се князя убихомъ[V1](aor.1pl.) Рускаго. поимемъ[V2](pres.1pl.) жену его Вольгу за князь свои Малъ и С(вя)тослава. и створимъ[V3](pres.1pl.) ему якоже хощемъ[V4](pres.1pl.)».「さあ，我々はルーシの公を殺した[V1]。彼の妻オリガを自分たちの公マルのために捕えよう[V2]。そしてスヴャトスラフも（捕え），これを思うまま[V4]にしよう[V3]。」

V1—V2—V3—V4

ii オリガの言葉：«добри гостье[S1] придоша[V1](aor.3pl.)».「よい客人たちが[S1]来た[V1]。」

S1V1

iii ドレヴリャネの使者の言葉：«придохомъ[V1](aor.1pl.) княгине».「私たちは来ました[V1]，公妃よ。」

V1

iv オリガの言葉：«да гл(аголи)те[V1](Impr.2pl.) что ради придосте[V2](aor.2pl.) сѣмо».「何のためにお前たちはここへ来た[V2]のか言いなさい[V1]。」

V1—V2

v ドレヴリャネの使者の言葉：«посла[V1](aor.3sg.) ны Дерьвьска земля[S1]. рькуще[V1′](PrPrtA.)[15] сице «мужа твоего убихомъ[V2](aor.1pl.). бяше[V3](impf.3sg.) бо мужь твои[S3] аки волкъ. восхищая[V3’](PrPrtA) и грабя[V3’’](PrPrtA). а наши князи[S4] добри суть[V4](pres.3pl.). иже[(S5: Rel.Pron.)] распасли[V5](l-Prt.) суть[V5’](pres.3pl.)

[15] v の例中の посла[V1](aor.3sg.) … рькуще[V1′](PrPrtA.) は послати「使者を送る」と речи「言う，語る」という二つの動詞を使って「使者を送って言う，使者を送って言わせる」という単一の発話行為を表すと考える。このような動詞表現を複合的発話動詞と呼ぶことにする。詳細は次を参照。*Сато Акихиро*. *Глагола* и *рече* в старославянском языке // Japanese Slavic and East European Studies 15. 1996. 47-93.; *Сато Акихиро*. Глаголы речи в старославянском языке // Comparative Studies in Slavic Languages and Literatures: Japanese Contributions to the 12th International Congress of Slavists. Tokyo: Japanese Association of Slavists. 1998. 113-149.; 前掲佐藤『中世スラブ語研究』178ff.

Деревьску землю. да поиди[V6](Impr.2sg.) за князь нашь за Малъ»».「ドレヴリャネの国が[S1]，こう言って[V1']，私たちを使者として遣わした[V1]のです。『私たちはあなたの夫を殺しました[V2]。あなたの夫が[S3]狼のように盗み[V3']，掠奪[V3"]を行っていた[V3]からです。でも私たちの公たちは[S4]善良で[V4]，ドレヴリャネの国をよく治めてきました[V5]。私たちの公マルに嫁いで下さい[V6]。』」

V1S1—V2—V3S3—S4V4—V5—V6

vi オリガの言葉：«люба ми есть[V1](pres.3sg.) рѣчь[S1] ваша. уже мнѣ мужа своего не крѣсити. но хочю[V2](pres.1sg.) вы почтити наутрия предъ людьми своими. а нынѣ идѣте[V3](Impr.2pl.) в лодью свою. и лязите[V4](Impr.2pl.) въ лодьи величающеся[V5](PrPrtA.). [и] азъ[S6] утро послю[V6](pres.1sg) по вы. вы[S7] же рьцѣте[V7](Impr.2pl.) «не едемъ[V8](pres.1pl.) на конѣх(ъ). ни пѣши идемъ[V9](pres.1pl.). но понесѣте[V10](Impr.2pl.) ны в лодьѣ». и възнесуть[V11](pres.3pl.) вы в лодьи».「私にはお前たちの言葉が[S1]気に入りました[V1]。もう私には自分の夫を生き返らせることができません。だから私は明朝自分の家臣の前でお前たちに敬意を表したいと思います[V2]。いまは自分たちの船に戻り[V3]，威張って[V5]船に入りなさい[V4]。私は[S6]（明）朝お前たちを迎えに使者を送りましょう[V6]。お前たちは[S7]『我々は馬でも行かぬ[V8]。徒歩でも行かぬ[V9]。我々を船に乗せたまま運べ[V10]』と言いなさい[V7]。そうすれば彼らはお前たちを船に乗せたまま運ぶでしょう[V11]。」

V1S1—V2—V3—V4—V5—S6V6—S7V7—V8—V9—V10—V11

vii オリガの家来たちの言葉：«зоветь[V1](pres.3sg.) вы Ольга[S1] на честь велику».「オリガが[S1]大きな栄誉（を与える）ためにあなた方を呼んでいます[V1]。」

V1S1

viii ドレヴリャネの使者の言葉：«не едемъ[V1](pres.pl.) на конихъ ни на возѣхъ. [ни пѣши идемъ[V2](pres.1pl.)] понесѣте[V3](Impr.2pl.) ны в лодьи».「我々は馬でも車でも行かぬ[V1]。［徒歩でも行かぬ[V2]。］我々を船に乗せたまま運べ[V3]。」

V1—V2—V3

ix オリガの家来たちの言葉：«намъ неволя князь[S1] нашь убьенъ[V1](PtPrtP.). а княгини[S2] наша хоче[V2](pres.3sg.) за вашь князь».「仕方がありません。私たち

の公は[S1]殺され[V1]，また私たちの公妃は[S2]あなた方の公に嫁ごうと望んでいます[V2]。」

S1V1—aS2V2

（x「オリガの言葉」，xi「ドレヴリャネの言葉」には動詞が現れないので省略する。）

○　合計：VS：SV ＝ 4：6

それぞれを例文の 4）や 6）のように模式化してみます。そのうえで全体を合計すると VS：SV ＝ 4：6 になります。話し言葉，日常の言語では現代語と同じく，SV が優勢な語順，自然な語順なのです。話し言葉では，語順について現代語と同じ機能的原理が働いていたようです。書き言葉でその語順を反映するのは「コメント」タイプのテクストです。一方の「事実叙述」タイプで優勢な VS 語順は，話し言葉の有標の語順を用いていることになります。しかし有標の形式が一回ごとに選択され，かつ多数を占めるのは考えにくいことです。「事実叙述」タイプのテクストの，決まった文体として，VS 語順があると考えられます。

このように『過ぎし年月の物語』では，テクストのタイプと語順が関係していることになります。そういう目でもう一度テクストを眺めると，同じ SV 語順の文でも，「事実叙述」タイプに現れるものと「コメント」タイプに現れるもので，違いがあることに気がつきます。あらためて 4）の例文を見てみましょう。SV 語順の文の多くで，主語 S とともに強調の小詞 же「しかるに，一方」が現れていることに気づきます。9 例中 5 例で же が現れます。これらの文は直前の文と異なる主語を持っています。ここで же は「主語の名詞」を強調するのでなく，「主語の交替」を強調するのです。

「事実叙述」タイプのテクストでは，VS 語順の文が連続して現れ，次々と新しい状況が出現していく様を述べています。же をともない，主語の交替を強調する SV 語順の文は，この事件の流れを引き留めます。これによって語りに一定のリズムが生じます。これが「事実叙述」タイプのテクストに特徴的な「文体」です。VS 語順の文と же を伴う SV 語順の文が一体となり，「事実叙述」タイプのテクストの「語りのスタイル」を作るのです。

一方「コメント」タイプのテクストに現れる SV 語順の文は，же を伴うことは殆どありません。6）では 10 例中 1 例だけです。主語の交替も任意です。連続する場合もあれば，交替する場合もあります。「コメント」タイプのテクストの基本語順は SV です。そしてその語順は現代語と同じ機能的原理によって一回ごとに選択されるのです。

以上，『過ぎし年月の物語』における語順についての観察をまとめると，10）のようになります。

10）　語順に関して

a. 「事実叙述」タイプのテクストの語順は VS を基本とし，SжeV がこれと交替する。特別な「語りのスタイル」をなす。
b. 「コメント」タイプのテクストの語順は「直接引用」タイプの語順，すなわち話し言葉の語順と一致する。現代語と同じ機能的原理によって選択される。
c. 「直接引用」タイプのテクスト，すなわち話し言葉の基本語順は現代語と同じく SV である。現代語と同じ機能的原理によって選択される。

内容的には，「事実叙述」タイプのテクストでは戦争の記録を始め，俗世間の出来事が語られます。一方「コメント」タイプのテクストでは，聖書の引用を含む宗教的，道徳的判断が下されます。この内容から見ると「事実叙述」の方が話し言葉と同じ日常の文体で書かれ，「コメント」タイプの方が何か特別な文体で書かれていると，考えたくなります。しかし実際はその逆です。語順に関して，二つのタイプのテクストの文体は，内容から予測されるものとは，反対の方向を指しています。

2. 数量的議論

以上の観察結果は，単なる偶然であって，たまたま例文にあげた文脈について

言えることと思われるかも知れません。そこで第 1 節の観察を数量的に確認します。資料は 1926 年刊行の『ロシア年代記全集　第 1 巻第 1 部　第 2 版』所収のラブレンチー本『過ぎし年月の物語』テクストの約 3 分の 1 に当たる 14 箇所，98 コラム中の動詞 3,192 個です。横軸にテクストのタイプ，縦軸に語順による分類を示しました。各数字の下の「%」は，V だけの文を除く 5 種類の文の合計を分母とし，各語順の文の起きる割合を示したものです。各数字の右肩および左下の小さな数字[16]の意味するところについては，次の第 3 節で議論します。

11）　テクストのタイプと語順：定動詞および述語的分詞[17, 18]

	事実叙述	コメント	直接引用
SV	${}_{3}138^{1}$ 15.4%	${}_{19}143^{1}$ 49.8%	${}_{5}113$ 52.3%
SжeV	${}_{11}258^{43}$ 28.7%	${}_{7}25$ 8.7%	${}_{1}4$ 1.9%
aSV	${}_{1}42$ 4.7%	11 3.8%	22 10.2%
VS	${}_{4}427^{1}$ 47.5%	${}_{3}101$ 35.2%	${}_{2}77^{1}$ 35.6%
VжeS	${}_{1}33$ 3.7%	7 2.5%	0 0%
V	1100	370	321
計	${}_{20}1998^{45}$	${}_{29}657^{1}$	${}_{8}537^{1}$
うち明示的 S を持つのは	${}_{20}898^{45}$	${}_{29}287^{1}$	${}_{8}216^{1}$

[16] 右肩の小数字は当該の語順の文で主語 S として遠称の指示代名詞 онъ が現れる場合，左下の小数字は主語 S として近称の指示代名詞 сь が現れる場合を示す。いずれも内数。

[17] 前掲佐藤『中世スラブ語研究』12ff., 68ff. を参照。

まず「事実叙述」タイプについて見てみましょう。明示的主語を持つ文のなかで VS 語順の文が優勢なこと，全体の半分を占めていることが確認できます。また SV 語順の文について，же を伴う SжеV タイプの文が，単純な SV タイプの約 2 倍多く現れることが確認されます。

次に「コメント」タイプについて見ます。小詞 же を伴わない単純な SV 語順の文が優勢で，全体の半数を占めていることが確かめられます。

「直接引用」タイプのテクストも同様です。そして「コメント」タイプと「直接引用」タイプの間には，全体として大きな差異はないことが分かります。「コメント」タイプのテクストは，書き言葉ですが，語順に関しては話し言葉である「直接引用」タイプと同じ特徴を持っていることになります。

また小詞 же が「事実叙述」「コメント」「直接引用」の順に多く現れること，接続詞 a は「直接引用」に多く現れることが観察されます。же は書き言葉に属し，a は話し言葉に属していることになります。

この節での数量的調査の結果は，前節で見た文脈に基づく観察が偶然でないことを示しています。

3. テクストのタイプと指示代名詞

指示代名詞の使用についても，テクストのタイプとの相関関係を見ることができます。上の 0 節でテクスト言語学の考えの幾つかを見ました。そこで，結束的

[18] 次のような場合をデータの範囲から除いた。1 . 主語が関係節化された関係節など構造上主語の位置が固定している文，2. 無人称文や不定人称文など，構造上主語が存在しない文，3. 命令法など明示的主語を取り得るが，現実には殆ど取らないもの，4. 語順が確定できない場合，5. 動詞的性質が弱い分詞など，6. 構造上，上の 1 から 5 の動詞形式に従属しているもの，7.「聖書引用」テクストに属するもの，8. その他。また完了や複合的発話動詞などの複合形は合わせて 1 つと数え，語順については，線状構造において先頭に現れるものを基準に判定した。詳細は佐藤『中世スラブ語研究』69ff. を参照。

テクストを作る手段としてハリデイとハサンが 5 つの方法をあげたことを見ました。その中の一つが「指示」reference（それ自身単独では意味解釈ができず，意味解釈のために何か他のものを参照することが必要になる言語形式）です。英語では，人称代名詞，指示詞，比較の意味を持つ形容詞がその代表ということになります。そのうちの 3 人称の人称代名詞と指示詞の働きを兼ねるのが古ロシア語の指示代名詞です。

古ロシア語には，直示的な用法にもとづいて遠称，近称，中称とされる 3 つの指示代名詞があります。遠称が онъ —— 現代語の 3 人称代名詞 он と同じ形です ——，近称が сь —— сей のさらに古い形です。イディオムの до сих пор，副詞 сегодня の構成要素と言ったら親しみがわくかも知れません。そして中称が тъ で，これは reduplication の結果 тот になりました。しかし年代記ではこの 3 つの指示代名詞が，テクストの中で同時に現れ，そのまま話し手との距離の違いを表しているわけではありません。指示代名詞の使用についても，テクストのタイプによる分布の違いがあるのです。

ここでもう一度 4）を見直すと，12）に再掲したように，SжeV 構文の主語として遠称の онъ が 3 回現れていることが分かります。

12）　4）の「事実叙述」タイプのテクストに現れる遠称の онъ[19]。
i　они^{S29} же рѣша^{V29}「彼らは ^{S29} 言った ^{V29}」
ii　они^{S32} же сѣдяху^{V32}「彼らは ^{S32} …… 座っていた ^{V32}」
iii　они^{S39} же рѣша^{V39}「彼らは ^{S39} 言った ^{V39}」

遠称の指示代名詞 онъ の使用も，語順とともに，「事実叙述」タイプのテクストの「語りのスタイル」を構成しているのです。その際，照応関係を見ると，直前の文の主語でなく，直前の文における斜格の補語が先行詞になります。つまり主語は連続せず，交替するのです。主語として，主格で現れる先行詞はもっと前

[19] 例中に現れる они は онъ の男性複数形。

方，遠いところに現れます。主格形の先行詞との「テクスト上の距離が遠いこと」── これが онъ の「遠称」であることの意味なのです。

一方，近称の сь は，13）に再掲したように，「コメント」タイプのテクストで，単純な SV 語順の文の主語＝テーマとして現れます。

13） 6）の「コメント」タイプのテクストに現れる近称の сь[20]。

i　си^{S1} быс(ть)^{V1} предътекущия кр(ес)тьяньстѣи земли.「この女（オリガ）は ^{S1}，…… このキリスト教の国にとっての先駆者であった ^{V1}」

ii　си^{S2} бо сьяше^{V2}「この女（オリガ）は ^{S2}…… 輝いていた ^{V2}」

iii　си^{S3} в невѣрныхъ ч(е)л(о)в(ѣ)ц(е)хъ свѣтящеся^{V3}「この女（オリガ）は ^{S3}，神を信じない人々の中にあって，…… 光を放っていた ^{V3}」

iv　си^{S6} бо омыся^{V6}「この女（オリガ）は ^{S6}…… 清められ ^{V6}，」

v　си^{S11} первое вниде^{V11} в ц(а)рство н(е)б(е)сное от Руси.「この女（オリガ）は ^{S11} 初めてルシから天の王国に入った ^{V11}。」

ここで女性形 си の指示対象はすべてオリガです。先行詞を文脈の中に求めることもできますが，コメントの対象となる人物を，直接指していると見るべきでしょう。文脈外の照応，ハリデイとハサン[21]の用語を借りれば外部照応 exophora ということになります。ここで「近称」とはコメントする年代記作者（さらにはそれを読む読者）とコメントの対象となる人物の心理的な近さ，絶対的近さを表します。この用法は，話し言葉での，直示的用法の延長線上にあると考えられます。

遠称の онъ と近称の сь の分布の違いは 11）に示した「テクストのタイプと語順」の表でも確かめることができます。先ほどは説明を飛ばしましたが，各語順の文の数を示した数字の右肩と左下に小さな数字があります。右肩の数字は主語

[20] 例中に現れる си は сь の女性単数形。

[21] *Halliday and Hasan*. Cohesion in English. 33.

として онъ が現れる回数，左下の数字は сь が現れる回数です。「事実叙述」タイプの SжеV 構文の主語として онъ が 43 回現れています。同じ構文の主語として сь が現れる回数は遙かに少なくなっています。一方「コメント」タイプの単純な SV 語順の文の主語として，сь が 19 回現れています。「コメント」タイプの文の主語として онъ が現れることは殆どありません。以上，数量的調査もこの節での文脈による観察結果を支持します。

最後に「中称」の тъ です。これは特定の分布を持たない，中立的な形と考えられます。ただし『過ぎし年月の物語』では，онъ や сь に比べその使用の数は限られています。тъ についての議論は省略します。

この節での観察結果は次の 14）のようにまとめられます。

14） 書かれたテクスト中での指示代名詞 онъ「遠称」，сь「近称」，тъ「中称」の使用

онъ：「事実叙述」のテクスト中で使用する：先行詞とのテクスト上の距離が遠いことを示す。語順，小詞 же の使用とともに「事実叙述」タイプのテクストの「語りのスタイル」の構成要素をなす。

сь：「コメント」のテクスト中で使用する：コメント対象を直接指し，その人物との心理的距離が近いことを示す。

тъ：特別の分布を持たない。実際の使用は онъ や сь に比べ少ない。

4. 結び[22]

ということで『過ぎし年月の物語』の言語について，テクストの構造，そして

[22] 当日配布のハンド・アウトでは，第 4 節のタイトル「テクスト言語学的に見た『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語の影響の可能性」をあげていたが，時間の関係で省略した。ここでも省略する。

語順や指示代名詞の使用といった談話レベルの現象について考えてみました。これで今日の私の話は終わりにさせていただきます。

長々と話してしまいましたが，決して悪意からではありません。チェーホフの「退屈な話」に出てくるミハイル・フョードロヴィチが，式辞を省略せずに最後の 4 枚まで読み切ったのを真似た訳でもありません。

私は要領よく話すのが苦手で，いつもはじめに余計なことを言ってしまいます。その結果最後に時間がなくなって，駆け足になってしまいます。今日もそうでした。それで口頭発表が嫌で，避けてまわり，ロシア文学会の全国大会でも，今まで一度も発表をしたことがありません。この賞をいただいたのは，せめて一度くらいは皆の前で話をしていけ，というお叱りか，励ましか，そんな皆様のお気持ちかと思い，今日はお話しさせていただきました。貴重な機会を与えていただき，どうもありがとうございました。

（さとう　あきひろ）